

# 陶淵明の日日

長谷川 滋 成

陶淵明の古里にはいくつかの説がありますが、今は淵明の最も古い伝記に記されている尋陽としておきます。尋陽は長江流域の今の江西省九江市です。その南には有名な廬山連峰が聳えています。淵明が生まれたのは西暦三六五年で、四二七年に数え年六三歳で亡くなっています。王朝で言いますと、東晋王朝ですが、淵明五六歳の時に不運にも東晋は滅ぼされ、続いて東晋を滅ぼした劉宋王朝が始まります。淵明は以後死ぬまでの七年間、屈辱的なことですが、生まれた国を滅ぼした敵国の民となることになります。淵明の生きた時代は日本でいえば、弥生時代と飛鳥時代の間の古墳時代で、今から千六百年前になり、結構昔の人です。淵明が亡くなったのが数えの六三、今年私は満の六三になりました。

こんなことを考えていますと、淵明は日日をどう過ごしていたのだろうと思ひまして、今日は時間を与えられましたので、淵明の残しました作品を拾いながら、六三年間どんな日日を送っていたのか、その一端をお話してみよう、ということにしました。私のことですから講演はようしませんので、お気軽に聞き流していただきたいと思ひます。

私の話よりも分かりやすいものを二つ持って来ましたので、初めに皆さんに見ていただくかと思ひます。一つは淵明の肖像画です。これまで私は淵明の肖像画を何枚か見ましたが、みな老人のもので若い時は見た

ことがありません。今日持つて来ましたのは私が最も気に入っているもので、明の周位の作で「淵明逸致」という題が付いています。「逸致」とは優れた趣きという意味ですが、「逸」は逸脱の逸で常識から外れて、優れているということです。酔っ払った淵明が脇から支えられている肖像ですが、その風体を見ながら、どこが常識から外れているのかご覧ください。その風体は恥ずかしながらもまさに私の風体です。

もう一つは写真です。付箋を二か所挟んでおきますが、それは淵明が生活した場だと伝えられる、現在の写真です。小さい写真ですが、一枚は棚田の田園風景で、田園の向こうに見えるのが先程言いました廬山連峰で、今日の話の終わりに出てきます。ただこの写真は廬山連峰の東側の田園風景で、淵明が住み耕していた廬山連峰の南側とは違いますが、似ているだろうとは思いますが。もう一枚は夕日が西に沈む農村の風景で、暗い画面ですが、よく見ると二・三の家と牛が一頭見えます。家の造りは現在のものですが、淵明の時代はどうだったのか、想像して眺めてください。なお、この写真は山口直樹さんという人が撮影したもので、山口さんは今から二十年前の一九八〇年から中国の写真を取り続け、これまでに三十数回、日数にして千二百日余り、スタツフなしのたった一人で、舗装もしていない凸凹道や上り下りの坂道を、五十詰以上の機材を背負い、欲しい風景を撮るために、一か所に一週間も十日間も、雨が降っても日が照っても、テントの中で待つという、自称「中国の文学・歴史をテーマとする風景写真家」です。

ところで皆さんの中には、淵明と言えば酒、朝から晩まで酒浸りたりの飲兵衛で、家の周りに菊を植えて眺め、何不自由なく楽しく、日日のんびりと過ごした、幸せなお爺いちゃんんで、自分もそんな日を送ったみたい、と思っている人がいらっしやるのではないかと、思いますがいかがですか。そんな日ならば私も送って見たいと思います、人間ってそんな美味しい日日を送れるようにはできていないようです。

さて、淵明は六三歳で亡くなりますが、ご存じのように「帰りなんいざ、田園將に蕪れんとす、胡ぞ帰らざる」という言葉を残して、役人から足を洗い、田園に帰ります。それは淵明四一歳の十一月のことです。淵明は二九歳で始めて役人になりますが、二九歳から四一歳までの十三年間に五回役人を変えます。しかしどの役人も長続きせず、辞めて古里に帰り、しばらくしてまた役人になり、辞めてまた古里に帰る、それを繰り返していました。古里に近い彭沢県の知事になったのは、最後の五回目のもので、「帰りなんいざ、田園將に蕪れんとす、胡ぞ帰らざる」と言ったのは、彭沢県の知事を辞め、田園に帰る時の言葉です。知事と言っても日本の知事とは違って、その地位は低く淵明は「小さな村」の役人と言っています。生涯五十年そこそこの時代、淵明は働き盛りの三十歳代の日日を、何を考えて送っていたのでしょうか。

淵明の詩文として残っているのは一五四篇ですが、四一歳以前に役人をしていた時の詩と、四一歳以後に古里に住んでいた時の詩を読み比べますと、前者の詩では役人になったのは本心ではないと後悔し、一時も早く辞めて古里に帰りたいと言ひ、後者の詩では自然に身を預け自分の生き方に思いを巡らせています。淵明は役人の日は決して楽しいと言つてはいません。ならばなぜ十三年間に五回も役人になったのでしょうか——一言で言えば貧乏から抜け出るためでした。淵明は貧乏でした。貧乏というよりも貧窮でした。貧窮から抜け出るためだったのです。淵明の詩文には貧の字が一八回、窮の字が二六回使われますが、貧とは金銭や衣食住が少ないこと、窮とはそれが全くないことを意味します。淵明は二九歳の時に始めて役人になりますが、役人になる理由を「立年（三十歳のこと）になろうとするとき、未を棄てて始めて役人になったのは、凍えや餓えが己れに纏わりつき、昔からの長い飢えに苦しみ、生活に節度が得られなかつたからだ」（「飲酒二十首」其の十九）と言ひ、貧窮から抜け出て、生活の節度を得るために、役人になったと言ひます。役人になれば貧窮から抜け出て、生活の節度も得られたはずなのに、役人生活は長続きせず、辞めて古里に帰って来ます。役人を辞める理由、その理由

は何だったのでしょうか。役人という仕事は淵明の本心に合わなかったからです。古里に帰って来れば元の本阿弥で、また貧窮になります。こんな事を五回も繰り返したのが、二九歳から四一歳までの、働き盛りの三十代の日日だったのです。

淵明の貧窮は半端ではありません。製作時期不明の詩に「若くしてわが家は貧乏神に逢い、年老いて一段と飢えから離れられない、菽や麦が実に羨ましくてならず、ご馳走に預かるうとは思ひもしない、月に九度しか食べられないほど飢え、暑いときでも冬着を着ていやになる」(「会ること有りて作る」と言い、若い時から老いるまで、生涯貧窮だったのです。淵明の自叙伝「五柳先生の伝」には、自分の衣食住について、衣は「貧弱な衣服は穴が開き破れを縫う」、食は「粗末な食器はしばしば空である」、住は「狭く貧しい家はひっそりとして、風や日の光がしのげない」とあります。生涯この貧窮が続いたのですが、淵明はこうした衣食住を自ら「晏如たり」、つまり安らかで平然と受け止めているのだ、言うのです。

金銭に関しては「五柳先生の伝」には何も言いませんが、別の詩に「子供はいるがお金は残さない、死後の事は心配無用」(「雑詩十二首」其の六)と子供にはお金を残さないと格好いいことを言いますが、実の所は残そうにも残すお金はなかったのです。淵明には「乞食」という変な題の詩があります。それは「飢えが襲つてきて私を駆り立てるが、どこへ行けばいいか分からない、歩きに歩いてこの村里にやって来て、門を叩いてもうまく言葉が出ない」で始まるもので、以下省略しますが、食べ物をお願い求める詩です。

端から見ますと、淵明という男はだらしがない、ちゃんとしろ、女房や子供もいるのに、本心に合わないとは何事だ、と思いたくなります。淵明は日日貧窮だったのに、貧窮を恥ずべきことだと思っていなかった風があります。と言いますのは、淵明には「貧士を詠ず」という七首連作の詩があります。淵明は「貧士」と言つて「貧者」とは言いません。「貧士」と「貧者」は違います。「貧者」は単なる貧乏人ですが、「貧士」は「貧であつて道を

楽しむ」(『論語』学而)者であり、「貧は士には通常の状態である」(『列子』天瑞)、「貧は士にはふさわしいことで、卑しいことではない」(『後漢書』卷八一范式伝)とあるように、貧は士には付き物なのです。学問や人格のある男子が「士」なのです。淵明は自分は「士」、つまり学問や人格のある男子だと思い、貧窮は恥ずべきことではなく、むしろ誇りにさえ思っていたように思われるのです。因みに「五柳先生の伝」に「粗末な食器はしばしば空である」とありましたが、それは実は淵明以前に孔子の弟子七十人中、貧窮を憂えず逆に楽しみとした顔回がいたのです。顔回は紛れもなく「士」です。また「五柳先生」が貧窮を「晏如」として受け止めていたのも、実は淵明以前にいたのです。その人は吃音のために議論するのが不得手で、黙々と思慮を巡らせ、沢山の詩文や著書を著した、前漢の楊雄です。楊雄も「士」です。淵明は自分も貧窮を貧窮としなかった、顔回や楊雄と同じ「士」だと、自分に言い聞かせていたのです。だから貧窮は恥ずべきことではなく、むしろ誇りにさえ思っていたように思われるのです。

「貧士を詠ず七首」の其の一の最後の四句に「自分の力を考えてこれまでの生き方を守り続け、(そのために衣食の)寒さと飢えに付きまとわれている、(こうした)自分を理解してくれる者がいないとすれば、どうしようもない(と嘆きはする)が悲しむことではない」と言い、貧窮なのは自分の本心を貫いたせいで、この世に理解者がいなくても悲しむに足りないとし、其の二以下には貧を守って後世に名を残した過去の聖人賢人を挙げ、自分もその聖人賢人の仲間であると自負するのです。つまり自分を過去の「貧士」に重ねて、自分の貧窮を価値づけ威厳を持たせようとしたのです。これは独創よりも伝統を重んじるという、中国古来の考え方に拠るものだと思います。

なお「貧士」を詩題にするのは、淵明以前にはなく、淵明が最初のようなようです。

淵明の文学、淵明という人物を理解しようとする時、私は「貧窮」の字がキーワードの一つだと考えています。

淵明が何か事を起こす際には、「貧窮」が念頭にあるように思うからです。

さて、先程言いましたように、淵明は一五四篇の詩文を残していますが、淵明の思いを、それは単純ではない複雑な思いなのですが、それを最もよく表しているのは、彭沢県の知事を辞めた後で書いた、よくご存じの「帰去来」という作品だと私は思っています。これには序文が付いており、それほど長いものではありませんので、私の訳を読んで見ます。

私は家が貧しくて、田畑の仕事をしてでも自給できなかつた。小さい子供たちは部屋いっぱい、餅には貯えた穀物があるわけではない。生きていくための糧、それを手にする方法が分からぬ。親戚や故人は私に役人になるようたびたび勧めてくれ、きれいさっぱりしようと思つたが、それをかなえる手だてがない。たまたま天下に事件が起こり、諸侯が金品や情愛こそ徳があるとした。私は叔父に貧苦であると思われ、かくて小さな村（の彭沢県）に採用された。当時はまだ風や波は収まらず、遠方への任務はいやであつた。彭沢はわが家から百里の所にあり、知事用の田圃からあがる利益は、酒を造るのに申し分ない。だからすぐに希望したのである。数日のうちに、帰りたい思いに襲われた。というのはあるがままの性質は、これを矯めて世の事に励むことができるというものではない。飢えと凍えとは確かにきびしいが、わが本心に背けばあれもこれも病むことになる。かつて世の事にかかわつたのは、まったく口や腹に使役されたからにほかならぬ。そこでがつくりきて嘆き傷み、平素からの志に深く恥じ入るのである。そう思いながら心に期していたのは、一年後には身じたくを整えて夜のうちに帰らねばならぬということ。まもなくして程氏に嫁いだ妹が武昌で亡くなり、急いで行きたい気持ちに駆られ、自分から辞めて職を去つた。仲秋八月から冬の間、官にいたのは八十日ばかり。妹の死がもとで心の動いたまで。この序文に書かれているのは、彭沢県の知事になるまでの経緯、知事になつてからの心境、知事を辞職する理由の三つですが、それは淵明の掛け値なしの、偽らざる正直な告白だと思います。つまり、田畑の仕事では貧窮

から抜け出ることができないこと、父として子供を養う義務があること、しかし自力で生活費を稼ぐことができ  
ないこと、国の混乱に巻き込まれたくなく、家族と一緒にいたいこと、酒米を作り好きな酒が飲めること、自分  
が信条とする「あるがままの性質」「わが本心」「平素からの志」には背くことができないこと、辞職は早くから  
決めていたこと、妹の詩が辞職の引き金になったことなどです。この序文にはありませんが、歴史家は辞職の理  
由として、県を統括する役人が視察に来ると言うので、淵明は「薄給取りの俺が何で頭を下げてぺこしなく  
てはならぬ」と言ったことを挙げ、その日のうちに辞職したとも伝えていきます。

彭沢県の知事を辞職した理由、それは「帰去来」の序文によりますと、「あるがままの性質」を貫くためだっ  
たのです。原文で言いますと「質性は自然なり」です。「自然」という語がキーワードで、それは孔子や孟子の  
儒家の語ではなく、老子や莊子の道家の語なのです。「自然」は道家の別の語で言えば「無為」とか「真」、普通  
の語で言えばやや言い過ぎかも知れませんが、「自由」「自在」と言っているかと思えます。何にも束縛されない、  
本来あるがままの状態を言う語です。「あるがままの性質」を貫くことが「わが本心」であり、「平素からの志」  
なのです。「わが本心」の原文は「己」の一字、「平素からの志」は「平生の志」です。これを「帰去来」の本文  
で言いますと、二回使われる「帰去来兮」の直後にある「田園將に蕪れんとす」と「請ふ交はりを息めて以て遊  
を絶たんことを」です。「田畑は荒れようとしている」、だから「帰ろう」と言います。また（世俗との）交遊  
をやめることにしたい」、だから「帰ろう」と言います。前者は自然の側に立ち、後者は人事の側に立つもので  
すが、それは「ありのままの質性」を貫きたい、だから「帰ろう」と同じことなのです。

「園田の居に帰る五首」の詩も「帰去来」と同じく、彭沢県の知事を辞め、「園田」に帰って来た四二歳ころの  
詩ですが、其の一の詩に「若い時から世俗とうまが合わず、生まれながらに邱や山を好んだ、意に反して世俗の  
中に落ち、あつという間に十三年が過ぎた、旅先にいる鳥は昔いた林を恋い慕い、池に泳ぐ魚は昔いた淵を思い  
懐かしむ、荒れ地を南側の野原辺りに開こうとして、世過ぎの拙さを守って園田へ帰った来た」と言い、続けて

これから住む家の様子について、「四角い宅地の広さは十畝ばかり、草葺きの家は八・九本の柱がある、榆や柳の樹が裏側の軒を覆い隠し、桃や李の樹が座敷の前側に並んでいる、遠く見える村の家々はほのかに霞み、村里から上がる炊煙は心ひかれる、犬は奥まった路地で吠え、鶏は桑の樹の天辺で鳴いている、門の内側には世俗の雑事はなく、何もない部屋はゆとりが充分だ」と言った後、最後の二句に「長い間籠の中にいたが、また自然に帰ることができた」と言います。

二九歳から四一歳までの十三年の間に役人をしたのは意に反してしたことで、自分の意は「邱山」「園田」「自然」にあるのだ、と言うのです。

ここで得られた一つの結論は、淵明は「自然」なる性質を貫いたということです。淵明がこの結論を悩み苦しんで得たことは、これまでの話でお分かりだろうと思います。私は淵明がこの結論を得るに至る心境を察しますと、戦国時代の一人の思想家を思い出します。それは分かれ道に来て、南に行くべきか、北に行くべきか、の二者択一で泣いたという楊朱という思想家です。淵明は意に反して役人となり貧窮から抜け出る道を行くべきか、それとも意に反しないで「自然」なる自分の性質を貫く道を行くべきか、その二者択一に泣いたと思うのです。淵明は日日酒を飲み菊を眺め、何不自由なく楽しく、のんびり過ごして得た結論でなかった、と思うのです。

さて、「世俗との交遊をやめる」「あるがままの性質」を実践する場が、「田園」だったのですが、淵明は「田園」で何をして日日を送っていたのでしょうか―四一歳以後の詩文から、具体的な動きを拾い、その実相を描いて見ようと思います。

淵明は早起きで、夜は遅くまで働いています。三九歳の詩に「朝早く車馬の用意をして（畑へゆき）、土地を耕すと心はゆつたりする」（「癸卯の歳の始春 田舎に懐古す二首」其の一）と言い、四二歳ころの詩に「朝早く



起きて雑草を引き抜き、月とともに鋤を背負って帰る」(「園田の居に帰る五首」其の三) と言い、四六歳の詩に「朝早く出かけて微力を尽くして働き、日が沈むと耒を抱えて帰って来る」(「庚戌の歳の九月中 西田に於いて早稲を穫す」) と言い、五九歳のころの詩に「朝は畑に水をやり、夜はあばら家に寝る」(「龐參軍に答ふ」) と言います。朝の早起きは田畑の仕事をするため、朝早くからの田畑の仕事は、日が沈み月が出るまで、夜になってもしたのです。それは貧窮から抜け出て、家族を養うためです。先の「帰去来」の序文にあったように、淵明は四一歳以前にも、「私は家が貧しくて、田畑の仕事をして自給できなかった。小さい子供たちは部屋いっぱい、餅には貯えた穀物があるわけではない」という経験をしているのですが、田畑の仕事では貧窮から抜け出ることができないことを承知のうえで、「あるがままの性質」を実践するほかなかったのです。端目には空しく見えても、淵明はやらざるを得ないので。なお、「小さい子供たちは部屋いっぱい」とありますが、後で淵明の家族を紹介しますように、淵明には五人の息子がいました。

淵明の田畑は家の近くにもあったと思いますが、「帰去来」には「幌つきの車を用意させて行くこともあり、一艘の舟に棹をさして行くこともある、(舟に乗り) 奥深く谷川に沿って進み、(車に乗り) 凸凹と丘を通り過ぎる」とあるのによりますと、車や舟で行く所にもあったようです。見ていただいた写真は棚田でしたが、棚田とは違った田畑もあったのでしょうか。淵明はその田畑にいろいろな物を植えます。例えば「豆を南山の麓に植えたが、草が茂って豆の苗はまばら」(「園田の居に帰る五首」其の三)、「桑や麻は日に日に大きくなり、私の土地も日に日に広がる」(「園田の居に帰る五首」其の二)、「畑の野菜は味わい充分、去年の穀物は今なおある(略)もち粟について旨酒を造り、酒ができると手酌で飲む」(「郭主簿に和す二首」其の一)、「語らって春できの酒を注ぎ、摘んだ自家製の野菜が肴」(「山海経を読む十三首」其の一)とありますように、豆・桑・麻・野菜・もち粟等の穀物を植えたようです。ということは、淵明は豆やもち粟や野菜を食べ、桑で蚕を飼い、麻で着る物を作っ



らしますと、五十代になってからではないかと思われ、「疝疾」に罹ったのは五十歳だと顔延年は言います。老いと病いが加わったという病いは、脚疾と疝疾のことだろうと思えます。淵明は若い頃からさまざまな病気を患い、田畑の仕事ができる体調ではなかったのですが、貧窮から抜け出るために田畑の仕事をしないわけにはいかなかったのです。

田畑の仕事は自然が相手であり、労力を尽くしたほど収穫が得られないことが多いものです。四二歳ころの詩には「道幅は狭くしかも草木は茂り、降りた夜露は野良着を濡らす、濡れるのは惜しくはないが、わが願いだけは裏切ってくれるな」（園田の居に帰る五首「其三」）と言ひ、四六歳の時の詩には「農夫は誠に苦しくてならないが、この苦しみを厭うわけにはいかない、身体はそれこそ疲れるが、禍災には邪魔されたくない」（庚戌の歳の九月中 西田に於いて早稲を獲す）と言ひ、淵明は日日祈るようにして、四一歳以前にもまして、田畑の仕事に朝から夜まで精を出し、製作時期不明ですが、引つ越しをした時の詩には「衣や食は当然自給せねばならず、精を出す畑仕事は私を裏切ることではない」（居を移す二首「其二」）と自らに言い聞かせるのです。「精を出す畑仕事は私を裏切ることではない」の原文は「力耕不吾欺」（力耕は吾を欺かず）です。あとに引けない淵明は「力耕」したに違いありません。それはしかし言うは易く行ふは難いことです。

淵明は貧窮から抜け出るために、朝早くから夜月が出るまで、日日田畑の仕事に精を出しますが、簡単に貧窮から抜け出ることはできません。田畑から上がる収穫以外、どこから生活費を得ていたのか、非常に興味がありますが、淵明は何も言わないので、残念ながら分かりません。

ここで淵明の家族を紹介しておきます。

淵明が生まれた時、祖父・祖母が生きていたかどうかは分かりませんので、祖父・祖母のことは省きます。淵

明の父は名は不明ですが、「子に命ず」の詩に「ああ重重しきわが亡き父は、淡泊にして無心、身を風や雲に預け、喜怒哀樂を表さなかつた」とあるのによりますと、世俗には関心を示さなかつた人のようで、これは淵明に影響を与えているかも知れません。淵明の母は征西大將軍の幕僚長を勤めた孟嘉の四女です。孟嘉は淵明の曾祖父の侃の十女と結婚していますので、淵明の父と母は従兄妹同士が結婚したことになります。淵明の兄妹としては四歳下の妹が一人いることが分かっています。その妹は淵明とは母親が違い、父の隠し女の子です。淵明八歳のころ父が亡くなり、淵明一二歳の時に妹の母が、妻は淵明三十歳のころに、母は淵明三七歳のころに、程氏に嫁いだ妹は淵明四一歳の時に、亡くなっています。肉親が次々に亡くなるという、家庭的には不幸な人でした。淵明が死に対して非常に敏感だったのは、次々に経験した肉親の死と無関係ではあるまいと思います。三十歳ころ妻を亡くした淵明は、直後に別の家の女と再婚します。淵明には五人の男の子がおり、その名も分かっています。上から儼・俶・份・佚・佟と言い、人偏の字をどの子にも付けたのは、淵明が人間に拘っていたことを示唆するのも知れません。このうち長男が初婚の妻との間の子で、次男以下は再婚の妻との間の子だと言われています。

先に挙げた詩の「子に命ず」は、子に名づける意味で、長男の儼が生まれた時に書いた、四言詩・八〇句の格調高い長い詩です。陶家の祖先は伝説の帝王の陶唐氏の堯であり、以下時代を追って祖先が偉大であることを得々と説き明かし、「お前の名を儼と言ひ、お前の字を求思と呼ぶ」としたのです。名の「儼」は『礼記』から取り、字の「求思」は『中庸』を著した孔子の孫の孔伋の字を借りました。「子に命ず」の最後は、「朝早くから夜遅くまで、お前が有能であることを願う、お前が有能でないとすれば、それはまた已むを得ぬか」と結び、由緒ある陶家の後継者として生まれた長男の誕生、その長男に儒家の本山の『礼記』や孔伋から名や字を付けたのだから、儼が有能でないとはいはないという、長男に対する淵明の期待の大きさが推し量られます。その期待は儒家の学問に励んで欲しい、という期待だろうと思います。

淵明は長男を初めとする子供たちを詩の題材にします。例えば「幼子が私の側で遊び戯れ、言葉をまねるが片

言ばかり、こうした事は本当に楽しく、まずは役人生活が忘れられる」(「郭主簿に和す二首」其の一)、「家内に言いつけて幼子を連れ、気持ちのいい日に遠出をしよう」(「劉柴桑に和す」)、「ともあれ子供や甥たちを連れ、藪を分け荒れた村に出かよう」(「園田の居に帰る五首」其の四)、「幼子の手を引いて部屋に入ると、樽いっぱい酒が用意してある」(「婦去来」)などです。

淵明は子煩悩だったようですが、一方に「子を責む」という詩があります。詩中の舒・宣・雍・端・通は、儼・俟・份・佚・佟の幼い時の名です。「(私の)両側の鬢はすっかり白髪、肌膚にも艶がなくなった、息子が五人いるというのに、どの子も勉強が嫌い、箭のやつはもう十六なのに、怠けようは天下無類、宣のやつはすぐ十五というのに、学問に志そうとはしない、雍と端とは年十三だが、六と七とが分からない、通くんはやがて九つになるのに、梨や栗を欲しがるばかり、天の定めがかくありとすれば、まずは酒でも飲むとしよう」。儒家の本山から名と字を付けた長男は、十六歳になりました。生まれた時に「お前が有能であることを願う」た淵明の期待はどこへやら、勉強嫌いで儒家の学問には遠く及ばなかったのでしょう。長男だけではありません。次男以下みなそうです。父としての淵明は子供らを責めずにはいられず、「子を責む」という詩を作ったのです。それにしても「天の定めがかくありとすれば」と呟いて、子供を俎に載せこれを肴にして飲む淵明、好感のもてるいい風景です。「天の定め」に責任を預ければ、万事解決するという、誰も傷つかない無難な解決法なのです。人間の叡知です。長男も次男以下も淵明自身も、誰も悪くないのです。「天の定め」が悪いのです。

この詩では淵明三十歳ころに亡くした先妻の子の長男が一六歳で、後妻の子の次男が一五歳ですから、本詩は淵明四四・五歳ころの作となります。四四・五歳になっても子供はかわいくて仕方なかったはずで、本当は「子を愛す」という題にしたかったのに、ふざけたりとほけたりしてそれを楽しむ癖のある淵明は、その時酒の肴がなかったので、五人の息子を肴にして、「子を責む」という題にしたのだ、と思うのがいいと思います。息子を酒の肴にする時、よく勉強するとか、人並み以上とか、呟いて飲んだのでは、酒ははずまないと思うのですが――。

なお、自分の子を詩の題材にするのは、淵明以前皆無ではありません。例えば西晋の詩人の潘岳には、幼くして死んだ娘を悼む詩があり、左思にはお茶目な二人の娘を詠んだ詩がありますが、不出来な息子を詩の題材にする詩人は、淵明が初めてです。この点で新しい題材を開拓した詩人と言えますし、これを継承したのが唐の大詩人杜甫です。ついでに言いますと、淵明は子供は正面きって題材にしますが、妻はしません。これに関しては私は「先生が言われるには、ただ女子と小人だけは養い難い。近づけると順わず、遠ざけると怨むからだ」と(『論語』陽貨)という孔子の発言の拠るのだと思っていますが、中国の文学理論を研究している興膳宏氏は「自分の妻や恋人のことに詩文の中で正面きって言及するのは、この時代の人々の意識において、はばからねばならぬことだったからである」(『潘岳陸機』筑摩書房)と言っています。この発言の裏には、妻は子供より劣り、取り上げるに足りぬ存在であった、ということがあるのでしょうか。

さて、「田園」に帰った来た淵明が、日日していた具体的なこととして、田畑の仕事がありました。自叙伝「五柳先生の伝」には、読書・飲酒・詩文を挙げています。この三つは淵明の日日の楽しみで、ここに生きる意義を見つけていたように思います。

まず、淵明の読書については「本を読むのは好きだが、詳細に理解することはしない、心にびったりと会えばいつも、うれしくなって食事を忘れる」と言います。「詳細に理解することはしない」というのは、淵明の読書法でその人柄を彷彿させますが、これは当時流行っていた「詳細に理解する」義疏学、つまり分析を重ねて奥深い意味を究める学問への反発も含んでいるようです。また「食事を忘れる」とは、孔子は夢中になると「食事を忘れる」と言う語が『論語』にあり、淵明はこれをふまえて「心にびったりと会えばいつも、うれしくなって(孔子同様に)食事を忘れる」ほどで、食事も忘れて読書に没頭し夢中になるということです。

淵明はどんな本を読んでいたのでしょうか。本の種類はさまざままで經史子集のすべてに亙り、また注にも及びます。例えば經では『周易』『尚書』『毛詩』『論語』『孟子』ほか、史では『戦国策』『史記』『漢書』『後漢書』ほか、子では『孔子家語』『管子』『淮南子』『老子』『列子』『莊子』ほか、集では司馬相如、班固、曹植、阮籍、潘岳、郭璞ほか、注では『毛詩』の毛萇注、『礼記』の鄭玄注、『楚辞』の王逸注、『淮南子』の許慎注ほかです。

これらの本の中には「心にびったりと会う」ものがあつたのでしよう。例えば『漢書』の皇太子の養育係の長官を辞めて郷里に帰つた、漢代の疏広と疏受の行為が「心にびったりと会」つて「二疏を詠ず」という詩を作り、春秋時代の三人の忠臣が、寵愛を受けた主君の後を追つて殉死した話を載せる『春秋左氏伝』を読み、「心にびったりと会」つて「三良を詠ず」という詩を作り、「荆軻を詠ず」は『史記』の秦の始皇帝を暗殺しようとして失敗したが、テロリスト荆軻の男気が「心にびったりと会」つて作り、各地の奇怪な草木鳥獸を記した古代の地理書の『山海経』を読んで「山海経を読む十三首」を作り、あるいは「昔、漢の董仲舒が士不遇の賦を作り、司馬遷がまたこの賦を作つた。私はかつて冬・夜・雨の時節や討論の余暇に、これらの賦を読み、ひどく心を傷」めて「心にびったりと会」つて作つたのが、「士の不遇に感ずる賦」です。

淵明は読書人です。若い時からこれらの本を琴と同じように楽しんでいました。例えば「若い時から俗外に身を寄せ、琴と本に心を預けた」（始めて鎮軍參軍と作りて曲阿を経しとき作る）、「付き合いを止めてゆつくりくつろぎ、一日の慰み相手は本や琴」（郭主簿に和す二首）其の二、「身内の心あるよい話がうれしく、琴や本を楽しんで憂いを消したい」（婦去来）。これらによりますと、淵明の読書は慰み物であり、憂いを消す物であり、いわば精神安定剤の役割を果たしていたように思われます。

ところで、淵明はこうしたさまざまな本をどのようにして読むことができたのでしょうか。淵明の時代は紙は

ありましたが、印刷術はありません。この時代に本を読むことができる方法は、大きくは三つあったと思います。一つは自分の家にある本を読む、二つは本のある所へ行って読む、三つは本を借り書き写して読むです。淵明の場合、曾祖父の侃は名将でしたが、下層階級の出身で、当時求められた門閥ではありませんでした。また淵明の父親は名も分からない人で、本があるほどの格式ある家ではなかったと思われまうので、一つ目の自分の家にある本を読む、それはできなかつたと思います。二つめの本のある所とは、首都の建康（今の南京）の官庁、あるいは淵明の古里にある役所ないし寺院、または地方の名家くらいです。淵明は首都の官庁勤務はなかつたので、古里の役所・寺院・名家で読んでいたのかも知れません。とりわけ淵明と交友のあつた慧遠が居た東林寺で読んだことは充分に考えられます。慧遠と東林寺については後で取り上げます。三つ目の本を借りて書き写して読むことは、充分に可能性ががあります。「飲酒二十首の序」に「酔つ払つてしまつと、いつも数句書いては一人楽しむ書き損じた紙は多く、字句に順序次第があるわけではない、ともかく知り合いに書いてもらい、手慰みにしようと思うだけ」とあるのによりますと、淵明は貧窮とはいえ紙はあつたようですし、借りた本を書き写すのも、あるいは知り合いに頼むことがあつたかも知れませんが、淵明より後の話ですが、『文選』に注をした唐の学者李善は、本文の傍証として千六百余りの本を引用するのですが、後世の『文選』研究家の中にはその凄さに驚嘆し、書籠つまり本箱と称された李善のことだから、かなり多くのものを覚えていたであろう、という人もいます。そう言えば隋代に始まつた国家統一試験の科擧は、経書の理解と暗誦が要求されました。淵明もあるいはかなりのものを覚えていたかも知れません。

続いて、淵明の飲酒について「五柳先生の伝」には、「生まれつき酒を嗜むが、家が貧しくていつも飲めるわけではない、身内や古なじみは私の事情を知つて、酒を用意して招いてくれることもある、出かけて飲めばいつも空にし、必ず酔つ払うのがわが決意、酔つ払つて（席を）退くときは、決して去るか留まるか未練を残したこ



とはない」と言います。「五柳先生の伝」の字数は全部で一二五字ですが、酒のことに三八字を費やすのは、淵明の生活における酒の役割の大きさを物語っています。

淵明は酒が大好きでした。

淵明が彭沢県の知事になった理由の一つは、三頃の広さの知事用の田圃があり、そこに酒を造るもち米を植えることができたからです。三頃の広さは約千五百アールですが、妻に反対されて仕方なく二五〇アールに普通のうるち米を植えたというのですが、八月に知事になり三か月後の十一月には辞めていますので、もち米の収穫には預かれず、酒を造ることもできなかったはずで、陰暦八月田植えをしたというのですが、二期作かどうかなのかよく分かりません。淵明は製作時期不明の詩で「この世に生きて望むものはない、ただ酒と長寿とだけあれば」（「山海経を読む十三首」其の五）と言ひ、淵明の酒は長寿と同じほどの価値があったのです。しかし好きな酒も「家が貧しくていつも飲めるわけではなかった」のです。淵明の飲んだ酒は清酒ではなく濁酒だったはずで、米や粟などの収穫がないと酒を造ることはできません。不作の年は飲めないのです。だからかどうか分かりませんが、淵明は「身内や古なじみ」が「酒を用意して招いて」くれると、この時とばかり「酔っ払う」まで飲むのです。「酔っ払う」と「未練を残さず」引き上げます。この飲み方は実は孔子の飲み方に近くて、孔子の酒は「量に限度はない。乱に及ぶことはない」（『論語』郷党篇）と伝えられています。淵明が孔子の酒の飲み方を意識していたかどうか分かりませんが、淵明の貧窮が孔子の弟子の顔回の貧窮に似ていることを、誇りにさえ思っていたことと重ねますと、意識していたかも知れません。

淵明が五十歳を過ぎると、酒を送ってくれる者が二人現れます。顔延年と王弘です。顔延年は淵明五一歳の時に、淵明が住んでいた近くの役人として赴任して付き合が始まり、毎日淵明の所に立ち寄って飲み、いつも酔っ払うまで飲んでいました。翌年役人を辞めて帰る時、二万銭をくれてやると、淵明は全額を酒屋に預け、少しずつ酒に換えて飲んだと言います。「二万銭」が今のお金に換算するとどれほどなのか分かりませんが、決して少

ない金額ではあるまいと思います。また、原文の「酒家」を「酒屋」と訳したのですが、淵明の住んでいた所には「酒屋」があつたようです。「酒屋」の規模はどれほどで、どんな酒を売っていたのかなど、興味は尽きませんが、残念ながら実態は分かりません。また王弘が淵明と出会うのも、王弘が淵明の近くの役人として来たからで、淵明五四歳の時です。王弘は淵明と知り合いになろうと思つていましたが、思うようにならなかつたので一策を案じたのです。それは淵明が廬山へ行くというのを事前に知り、道の途中に酒を整えて淵明の友人を使い遣りますが、脚の不自由な淵明は歩くことができず、籠に乗せられて行き、行き着くと心ゆくまで飲んだと言います。王弘はわざと遅れてやって来て、知り合いになることができると言います。また、淵明は重陽の節句だといふのに酒がないまま、菊が沢山生えている家の近くへ出かけ、そこにしばらくいると、王弘が酒を送り届けてくれたので、淵明は手酌で飲み酔つ払うと帰つて来たと言います。結構ただ酒も飲んだようです。

今、紹介しました顔延年と王弘は役人です。淵明は四一歳で「帰りなんいざ、田園将に蕪れんとす、胡ぞ帰らざる」と宣言して「田園」に帰つたのですが、帰つた後も役人との交流をまったく絶つていたのではなかつたことが分かります。一五四篇の詩文には「田園」に帰つて以後、交流のあつた役人を詩題にすえて詠んだ詩が十首ばかりありますが、その中の「王撫軍の坐に於いて客を送る」の「王撫軍」は王弘のことです。「撫軍」とは撫軍將軍のことで、天子を輔佐することもあるほど、將軍の中ではかなり高い地位でした。「田園」に帰つた後も役人たちとなぜ交流を持ったのか、淵明の意図はよくは分かりません。淵明は役人生活にまだ未練があつたのかとも想像しますが、五四歳の時と六二歳の時に役人になることを勧められます。しかし両方とも辞退していることを見ますと、未練があつたとも思われません。今は淵明は天下の趨勢にはまったく無関心ではなかつた、と考へておこうと思ひます。冒頭に言ひましたように、淵明五六歳の時に、淵明の生まれた東晋王朝が滅び、次の劉宋王朝の民となることを余儀なくさせられた天下の趨勢に、淵明とて無関心であることはできなかつたのではないか、と考へておこうと思ひます。

話を酒にもどしますと、残っている詩文一五四篇のうち三四篇に三九回酒の字があり、一七篇に觴の字が、七篇に酌・醪の字があります。また詩の題の「連雨に独り飲む」「飲酒二十首」「酒を止む」「酒を述ぶ」には「飲む」「酒」を使いますし、『陶淵明集』を著した梁の昭明太子はその序に「どの篇にも酒がある」と言うのは、誇張ではありませんが、言い得ていると思います。明治の石川啄木も淵明を読んでおり、漢文で書いた二三歳の日記に、「淵明の集を読み、感ずること多少ぞ。(略)嗚呼、淵明の飲みし所の酒は、遂に苦かりしならん。酒に酔ふは苦き味に酔ふなり」と記し、淵明の酒は苦かったと言います。確かに苦かった酒もあり言い得ていますが、日苦い酒ばかり飲んでいたのでないようです。例えば、周囲の景物に融け込んで飲む酒、気のあつた近所の人と飲む酒、田畑で汗を流す農夫と飲む酒、世俗を超越した人と飲む酒は旨い酒です。また田畑の仕事で疲れた心身を癒す酒も、人との別れに飲む酒もあります。さらに移り行く時の流れに付いて行けない人の命を見つめ、生きていく短い時を充実させるために飲む酒もあります。

昔の『詩経』『礼記』『漢書』などの本には、酒は憂いを忘れさせ、歡びを共にし、老化や病気を防ぎ、最高の薬で、嘉き会合の御馳走だと、書かれています。淵明自身も酒の良さについて、「酒はもろもろの憂いを払いのけ、菊は年を取るのを食い止める」(「九日閒居」)とか、「(菊を)この憂いを忘れるという酒に浮かべ、私の世俗から超越したいという思いを深くする」(「飲酒二十首」其の七)とか、「もの知りの老人が私に酒をくれ、なんと飲んだら仙人になれるという、飲んでみるともろもろの俗情はなくなり、何杯も飲むとふと自然と一体になれる」(「連雨にて独り飲む」)とか言います。

「自然と一体になれる」の原文は「天を忘る」で、『莊子』にある語です。「自然と一体になれる」と、どんな憂いでも忘れることができるのです。

淵明は貧窮のため酒が飲めないこともありましたが、それでもやりくりして結構飲んだのではないかと思いま

す。しかし自分の葬式のことを詠んだ詩には、「ただ無念なのはこの世にいた時、充分に酒がのめなかつたこと」〔挽歌の詩三首〕其の一〕と言ひ、この世に無念を残して死んでいったのです。

次に淵明の詩文についてですが、「五柳先生の伝」には「いつも詩文を著して自分一人で楽しみ、少しばかりわが主義を示した」とありました。「わが主義」と訳した原文は「己が志」です。「己」は以前に「わが本心」と訳した「己」と同じであり、「志」は以前に「平素からの志」と訳した「平生の志」の「志」と同じで、この「わが主義」と訳した「己が志」も、具体的には「自然」を貫くということになります。

「いつも詩文を著して」という淵明の詩文は、隋代の歴史書の『隋書』には「宋の徴士の陶潜集九卷。梁五巻、録一卷」とあり、梁の昭明太子が編纂した『陶淵明集』は今に伝わらず、淵明の詩文の実数は不詳ですが、清の陶澍が編纂した『靖節先生集十巻』によりますと、今に残っているのは、先程から言いますように一五四篇です。一五四篇のうち詩は四言詩と五言詩で、樂府はありません。文は辭賦・記伝・祭文です。

詩の題材は身近なものが多く、耳や目に触れたものを詠みます。淵明の詩に使われる風物は、天・雨・時・土・山・石・阜・穴・谷・川・水・邑・里・舟・玉・田・火・獸・鳥・魚・虫・木・竹・草・果に関するものです。従つて淵明の詩は自ずと自然の風物・風景を詠むことが多くなり、四言詩・五言詩の大半は風物・風景を詠み込んでいます。それを詠物詩、贈答詩、行旅詩、雑詩、田園詩、遊覽詩に分けて詠むこともできますが、これらの風物・風景を詠む詩は、淵明の後の劉宋の謝靈運の山水詩を生む先駆けとして、注目すべきことなのです。田園詩と山水詩は似ていますが、区別するとすれば、田園は日常目に触れる田畑や農村・郊外の風物や風景で、山水は日常目に触れない深山・幽谷です。言い換えますと、田園は俗中の風物・風景で、山水は俗外の風物・風景ということになります。淵明の詩の風物・風景は俗中のものです。

淵明の文章では「五柳先生の伝」「歸去來」「桃花源の記」はよく知られていますが、「閑情の賦」という作品

があります。この「情」は官能的で、その官能的な「情」を静めるといふのがこの作品です。長い作品なので真ん中あたりを訳して紹介します。

願わくは貴女の上着の襟となり、美しい頃の残り香を承けたい

ああ薄絹の襟が夜脱ぎ捨てられると、秋の夜が半ばにもならぬのを怨んでしまう

願わくは貴女の裳の帯となり、なまめかしくか細い体を縛りたい

ああ寒さ暑さの気が変わると、古いのを脱ぎ新しいのを着てしまう

願わくは貴女の髪の毛の油となり、なで肩にかかる黒髪を梳きたい

ああ美人はいつも湯浴みして、白く澄んだ水で油を流してしまふ

願わくは貴女の眉の黛となり、遠くを眺める時は静かに揚がりたい

ああ紅も白粉もまだ鮮やかなのに、美しい化粧にやりかえてしまふ

願わくは貴女の寝台の布団となり、弱い体を秋の三か月癒して上げたい

ああ模様のある布団に代わると、何年経つても見捨てられてしまふ

願わくは貴女の絹の履となり、白い足にくっ付いて立ち回りたい

ああ振るまいにも節度があつて、空しく寝台の前に棄てられてしまふ

願わくは昼には影法師となり、いつも体に寄り添いあちこち行きたい

ああ高い樹には蔭が多く、時には一緒でないのを嘆いてしまふ

願わくは夜には蠟燭となり、美しい容姿を二つの柱の所で照らしたい

ああ朝の太陽の光が差し込むと、蠟燭の光はたちまち消え失せてしまふ

願わくは竹には扇となり、涼しい風を柔らかな手に含ませて上げたい

ああ白い露が朝方降りる時には、襟や袖を思いながら別れてしまふ

願わくは木には桐となり、膝の上の音色のいい琴になりたい

ああ楽しみが尽きると哀しみが来て、終には私を押しやつて音をやめてしまふ

この作品の製作時期は不明ですが、作品中に「わが田園生活には暇が多く、筆を執つてこれを作る」「若さが夕暮れになるのを悼み、この歳が尽きようとするのを恨む」と言うのによりますと、田園に帰つた四一歳以後の作だろうと思ひますが、こんなものを淵明は書いたのか、と思わせる衝動的な作品です。三〇歳ころ妻を亡くし、直後に再婚した淵明です。これは亡くした妻を偲んだ作品だと、説明する人もいます。淵明とて男、女性に關心があつて当然で、正常で健康的だと見ることもできます。自分の情を包み隠さず書く、淵明のものを書く主張を見る思いがします。

淵明がこの「閑情の賦」で本当に願うこと、それは淵明の性に巣くう情欲を満たしてくれる女性ではないのです。淵明は時間の移り変わりに非常に敏感で、特に死には敏感でした。死を達観しているようで達観し切れず、酒で死を紛らわしたり、山や川や花や鳥で紛らわしたりしました。情欲は酒や山・川・花・鳥の言い換えで、情欲を願うことではありません。この作品の序に「勝手な表現にならぬよう淡泊を旨とし、始めは気ままだが終りは平靜になる、中庸の道から外れた邪心を抑えて、世の中を諷刺する一助としたい」と言うのが、このことをよく表しています。

ところで、淵明の一連の詩文は淵明の生存中、どう評価されていたのか知りたい思ひがしますが、それに応えてくれる資料は見つかりません。ただ淵明に酒を飲ませてくれたあの顔延年が、淵明の死を悼んで書いた文章に「詩文は達意を旨としている」という一文があります。原文は「文は指達を取る」です。この四字の意味するところは、これと対になる「学問は師を名のるほどではなく」と合わせ考えますと、淵明の詩文を貶めた言葉ではないにしても、褒め称えた言葉ではないように思われます。それは淵明の死を悼んだ顔延年の文は、序文が七八

句、本文が一六句からなる長文なのですが、淵明の詩文に言及するのは、この四字しかないと考えます。そう考えていいと思います。つまり淵明の詩文はただ達意を旨としているだけで、それ以外何も無いという冷やかな評価だと思います。当時詩文に求められたのは、達意以外に語句の新鮮さ、対句の新奇さでしたが、淵明の詩文にはそれが欠けていた、というのでしょうか。淵明が亡くなって四十年後に生まれた鍾嶸は、文学評論書の『詩品』を著し、鍾嶸以前には淵明の詩文は「田舎者の言葉」と評価されていたことを伝えています。原文は「田家語」です。生存中の淵明の詩文はどれも芳しい評価を得ていなかったと結論してよからうと思います。淵明の詩文を高く評価したのは、「私は平素から淵明の詩文が好きで、手から放すことができない」と言つて『陶淵明集』を編纂し、またその詩文八篇を自ら編纂した『文選』に採録した梁の昭明太子を待つことになりました。なお、淵明の詩文は『日本国見在書目録』に「陶潜集十卷」の記載があり、王朝時代すでに日本でも読まれていたようです。

さて、淵明は「五柳先生の伝」で「自分の書いた詩文の中で、少しばかりわが主義を示した」と言っています。「わが主義」の中身はいったいどんなことなのでしょう。最後にこのことについて、淵明が日日眺めていた廬山を手がかりにして、お話ししようと思います。

廬山は淵明の家から見ると南側にありましたので、淵明は南山と呼んでいます。淵明の詩には「南山」が三回、「南山」と同じ「南嶺」「南阜」が一回ずつ使われますが、最も人口に膾炙されているのが「飲酒二十首」其の五の詩です。淵明は家の南側にある廬山を眺めて、日日を送っていたのですが、何を考えて日日廬山を眺めていたのでしょうか。「菊を（小屋の）東側の垣根のあたりで摘みとり、ゆつたりした気分で南側の山を見る、山の霧囲気は（うす暗い）日暮れに美しく、空飛ぶ鳥は群をなして（山の畔へ）帰る、この中にこそ真意がある、説明しようと思つたが（真意を会得した今）その言葉はもう忘れた」。

「ゆつたりした気分で南側の山を見る」の原文は「悠然見南山」です。「悠然」の意味は「はるか遠いさま」「心のゆつたりしたさま」のことです。「悠然として」は動詞の「見る」を修飾し、「南山」を「見る」淵明の形容なのですが、同時に体言の「南山」も修飾し、「見」られる「南山」の形容であると、読む人もいます。つまり「悠然」として「悠然」たる「南山」を「見る」と読むのです。廬山が「悠然」としており、その「悠然」たる廬山を、淵明は「悠然」とした思いで「見」ているのです。このことは淵明と廬山が一体になっていることを意味し、廬山は淵明と一体化させてくれる山だったのです。

そうだとしますと、「飲酒二十首」其の五の冒頭に「粗末な小屋を構えて俗人の居る処に住み、しかし（役人の乗る）車や馬の喧しさはない、聞いてみるがどうしてそのように居られるのかと、心を遠くにおくと住む処は自然に辺鄙になるのだ」と言いますのも、廬山と淵明が一体になっているからかも知れません。

では廬山とはどんな山なのでしょう。廬山は一山の名ではなく、九十九の峰の総称で、連峰の名です。この廬山連峰はすでに言いましたように、淵明の家からは南側に見えます。ものの本には、廬山連峰は三千万年前に形造られ、二百万年前は氷の山で、廬山という名は周代の匡俗という者がこの山に隠れ棲み、定王（在位紀元前六〇六〜紀元前五八六）が使者を遣ったところ、すでに仙人となつて立ち去り、廬だけ残っていたので、廬山と名づけ、匡俗に因んで匡山・匡廬とも言つてあります。廬山とは仙人の廬という意味です。

廬山連峰にいたのは仙人だけではなく、僧侶も棲んでいました。「太元十一年（三八六）、薪採りの其陽という者がいた、このとき美しい霞は林にかかり、夕日は山に照り映えていた、見ると一人の僧侶が、袈裟を着てぼつんと巖の中にいる、にわかには袈裟をはたき杖を振り動かし、崖を越えて真つすぐ上がつて行く、夕焼け空をおしわけて軽くあがり、九折坂から起つて一氣にめざす、白い雲に乗つたからには、仙都は決して遠くはない」（湛方生「廬山神仙の詩の序」とあります。湛方生は淵明よりやや先輩に当たります。



廬山連峰は南北二九段、東西一六段、最高峰は漢陽峰の一七四七段、五人の老人が肩を並べた形の五老峰は一三五八段。名刹の西林寺・東林寺もあります。後の唐代の白居易の詩にある「遺愛寺の鐘は枕を傾けて聴き、香炉峰の雪は簾を撥ね上げて看る」の遺愛寺・香炉峰は廬山連峰の北側にあり、また李白が「飛沫が真つすぐ三千尺流れ落ち、その様はまるで天の河が中天から落ちるようだ」と詠んだ瀑布もあります。

廬山連峰と言えば名僧の慧遠で、慧遠と淵明とは深い縁があります。中国哲学研究者の福永光司氏によりますと、西林寺は淵明が三歳の時に祖父の兄の範が建てて、慧遠の兄弟子の慧永を住まわせ、淵明が二二歳の時に慧永が慧遠のために建てさせたのが東林寺だ、と言います。東林寺に入った慧遠は、淵明の親戚の張野や淵明の友人の周統之・劉遺民ら十八人を集めて、白蓮社という仏教教団を組織し、中国浄土宗の発祥地となるのですが、その基盤を作ったのは、実は淵明の祖父の兄だったのです。淵明も白蓮社へ誘われたとする説もありますが、誘いにはどうも乗らなかつたようです。慧遠は淵明より三三歳年上ですが、次の逸話によりますと、二人の間は緊密だったようです。「廬山の東林寺の三門の内に虎溪という名の堀がある。廬山に住んでいた慧遠は、虎溪を過ぎて人を見送ることはしなかつた。淵明と僧侶の陸修静を見送った時のこと、話に夢中になり思わず知らず虎溪を過ぎていた。三人は互いに顔を見合せて笑った。世間では虎溪三笑と言っている」（『廬山記』）。白蓮社への誘いには乗らなかつたとしても、淵明と慧遠及び仏教とは無関係だとは言い切れないと思います。

太古からの由緒があり、道を体得した仙人・僧侶が棲み、常人は容易に踏み込めない、深山幽谷の俗外の地にある、靈験新たな霊山が、廬山連峰です。「悠然」と存在する霊山の廬山連峰と一体になった淵明は、何を考えたのでしょうか。

ぼんやりと薄暗い夕暮れの、廬山連峰が醸し出す、目には見えない雰囲気と、その雰囲気が辺りに漂う時に、鳥たちが仲間とともに罅に帰って行く光景を見て、「真意」を見いだすのです。淵明の詩文には「真意」以外に

「真を含む」「真に任ず」「真想」「真を養う」「真に復る」のように使い、「真」の字は淵明の思想を理解するキーワードの一つですが、「真」は儒家が使用する語ではなく、道家の語であることは明瞭です。「真意」はいろいろに解されていますが、道家の別の語に置き換ええますと、無為自然の道という「無為」であり「自然」であり「道」であると思います。

ここで思い出されるのが、彭沢の知事を辞職した理由の「質性は自然なり」です。淵明はこの「あるがままの性質」を「わが本心」と言い、「平素からの志」とも言っていましたし、私は「自然」を「無為」「真」「道」に、さらに「自由」「自在」の語で言い換えました。要するに淵明は廬山連峰の雰囲気と光景に、若いころから日もち続け、愚直なまでに貫き通した「自然」つまり「真」を確認したのです。言い換えれば、「自然」「真」を貫き通すために、四一歳にして役人を捨てて「田園」に帰り、廬山連峰と一体となって「自然」「真」を確認し、自分の判断に狂いはなかったと、淵明は思ったに違いないと思います。

「悠然」と存在する霊山を「悠然」たる思いで「見」ていると、淵明の心の中に渦巻くもろもろの憂いは消え、心が安らいだに違いありません。淵明の心を癒し、生きる活力をくれるのが、靈験新たかな霊山の廬山連峰なのです。

「自然」「真」は言葉で説明するものではなく、会得するものだと言い、「自然」「真」の意味合いを会得した今は、言葉は忘れてしまったと言います。淵明にとつての「自然」「真」とはそんなものだったのです。

なお、廬山連峰に「見」えるのは、「鳥」だけではなく「雲」も「見」えます。右の詩には「雲」は詠みませんが、「帰去来」に「雲は心を無にしてほら穴から出ていき、鳥は飛び疲れると瞬へ帰ることを知っている」と「鳥」との対で詠まれる「雲」は、廬山連峰に「見」えるものだと思います。「心を無にして」と訳した原文は「無心」です。「無心」も道家の語で、「自然」「無為」「真」に通じるものです。「帰去来」に「南側の窓にもた

れて世俗を見くだす思いを寄せ、膝が入るほどの狭い処が落ち着けることを実感する」とあるのは、「南側の窓」から廬山連峰の「鳥」や「雲」を眺めて、淵明は「真」「無心」の境地になり、世俗を見くだしていたのです。

私の話はこれで終わりますが、今日お話したのは淵明の全容ではなく、最初に申しましたとおりその一端であることを、改めてお断りしておきます。貧窮・子供・読書・飲酒の話もその一端です。今日全くお話しなかったことで、淵明を知る上で大切なことを二つ補足しておきます。一つは淵明は本身と分身を設定して、自己の多面性を分析したり凝視したりして、自己を客観視する作品が沢山あります。もう一つは淵明が肉親を次々亡くしたことは指摘しましたが、淵明は死に關して沢山の発言をしています。この二つのことは、書き残したものから推測しますと、酒を飲みながら考え、廬山連峰を見ながら考え、日日夜夜から離れることはなかったと思います。死を考えることは、当然生を考えていたということです。また、今日はまた淵明の生きた時代がどういう時代であり、淵明以前の時代がどうであったかについても、まったく言及しませんでした。役人と田園の間を行き来する、言い換えると官と隠の間を行き来する、儒教と道教の間を行き来するのは、特異なことであったのか、これについてもまったく言及しませんでした。

このような淵明を人は、隱逸詩人とか田園詩人とか呼びます。この呼び名には初めに言いましたように、何不自由なく楽しく、日日のんびりと過ごした、楽隱居という印象が強いのですが、淵明の日日は決してそんなものではありませんでした。また孤独の詩人・矛盾の詩人・世俗と超俗とを合わせ持った詩人などと呼ぶ人もいますが、これとて淵明の一面をとらえての呼び名です。あえて私が言いますと、喜怒哀楽の情を包み隠さず正直に言う、どこにもいるごく普通の人間で、表現を飾る当時の流行に乗らないで、思うことをそのまま詩にした、庶民詩人と呼んでおこうと思います。呼び名を付けるのは勝手ですが、淵明は墓の中でどう思っているのでしょうか。

淵明が付けて欲しかった呼び名、それを淵明の使った語から探しますと、「帰園田居五首」其の一にありました「守拙」だろうと思ひ、「守拙」詩人と呼んでおきたいと思ひます。「守拙」は先程「世過ぎの拙を守る」と訳しておきましたが、「拙」とは不器用さ・要領の悪さで、それを大事に守り抜くのが、「守拙」ということです。「守拙」詩人。愚直詩人と呼んでもいいかと思ひます。

終わりまでお付き合ひいただきまして、ありがとうございました。

(本稿は平成十三年八月十一日、第四十二回広島大学教育学部国語教育学会の講話に、相応の修正を加えたものである)